る。『天台大師和讃』では「51説法もっとも第一なり」と、出典を踏まえ、また控えめではあるが語り手が直接的に褒め称えたような部分がある。それが『慈慧大師和讃』においては、「7高僧多キ其中カニ　8大師ニ過ギタル人ハ無シ　48智慧弁才無窮ナリ　81中ニモ大師ハ勝レテゾ」など、より強まった表現となっている。古和讃においては仏・仏世界ともに近い位置から語られているが、人間である僧はより身近に感じさせるように語られるといえよう。中世和讃の僧讃としては親鸞（一一七三―一二六二）が『高僧和讃』を制作している。個人に寄り添った古和讃系のものに比べ、その僧個人の歴史ではなく、個人の時間や空間を超えた仏法の流れを軸として展開される。ここから古和讃を逆照射するなら、よりそういった点が際だって見えてくるだろう。しかしこれは親鸞独自の個性といえ、後に親鸞を歌った和讃では出自などから始まり年を追って歌われていく。

仏讃・法讃・僧讃のいずれにおいても、古和讃はそれらに近い視点から語られる。それらを聴き歌う人にとっても、より身近に実感的に感じられるように構成されるといえよう。後世作られる和讃はこういった面が強調されていくと考えられる。それは分かりやすく親しみやすいものとなっていく反面、一面においては俗化する要因であるとも考えられる。以上が本発表の概要であるが、文学的価値は劣るといわれるものの多数制作された近世以降の和讃を検討していくことが課題となる。

荆南における詩僧齊己

福井　敏

衡岳沙門・齊己（八六四？～九四三？）は、ほぼ同時代を生きた禪月大師・貫休（八三二～九一二）と並んで、唐末五代における二大詩僧とされる。詩僧とは、僧としての求法を行う以外にも士人や他の詩僧と詩の応酬を積極的に行う僧のことをいう。唐が滅んで以降、多くの詩僧は北方に成立した、後梁・後唐・後晋・後漢・後周という「五代」王朝の勢力範囲ではなく、「十国」と呼ばれる地方政権、なかでも南唐や呉越といった江南地域や今日でいう四川地域にあたる前蜀及び後蜀に住していた。

かれらがこういった地域に偏在していた理由には以下のようなことが考えられる。まず、江南地方の場合は南唐の李氏や呉越の錢氏が仏教を厚く保護していただけでなく、中唐初期の靈一や皎然といった江左の詩僧たちの活躍の場であったことも影響していたであろう。また、蜀の場合はもとより仏教の盛んな地であったうえに戦乱の世にあってもある程度の文化水準を保っていたため、僧だけでなく多くの文人も避難したためである。

齊己もその例外ではない。入蜀の志をもっていた彼は、途上の荆南に居を定め、龍興寺の僧正となった。このことは「梁江陵府龍興寺齊己傳」（『宋高僧傳』巻三十）に記載されているのだが、この伝にはこれ以外にも齊己が荆南に留まることになったいきさつについて

高氏遂割據一方。搜聚四遠名節之士。得齊之義豐南嶽之己。

以築金之始驗也。龍德元年辛巳中。禮己於龍興寺。淨院安置給其月俸。命作僧正。非所好也。

と書き記している。これによれば、荆南での生活はとうてい齊己の意志に沿ったものとはいえない。

地方の権力者たちがこぞって詩僧や文人たちを保護しようとする動きをみせたのには、彼らの「国」の存続とも深い関わりがある。王たちは詩僧や文人たちのもつ独自のネットワークを利用して他国の動きについての情報を得ようとしたのである。齊己が荆南にやって来たときはちょうど後唐の成立前後の時期と重なっており、弱小国であった荆南にしてみれば、詩僧としてすでに高名であった齊己を留めおいたのは当然のことであった。

以上のように齊己自身の希望とはかけ離れた形ではあるが、彼はこの地で領主である高氏一族の保護をうける。そして、梁震や孫光憲といった政権中枢にいた文人たちとも詩の応酬をすることになるのだが、梁震及び孫光憲は荆南において、最も唐代士大夫の風を色濃く残していた人物であり、唐末の二大詩僧の一とされる齊己が詩の応酬をするのにふさわしい人物であった。この二者にしても、積極的に荆南高氏に仕えたわけではなかった。『十國春秋』巻一〇二が、

梁開平初。歸蜀道過江陵。武信王喜其才識。留之不遣。欲奏爲判官。震自以唐臣。恥爲強藩屬吏。即亡去。又恐及禍。

また、

（孫光憲）唐時爲陵州判官有聲。天成初。避地江陵。武信王奄有荆土。招致四方之士。用梁震薦。入掌書記。

というように、どちらかといえば、武信王・高季興（あるいは文獻王・高從誨）に強いられてやむなく荆南政権に協力していたというのが実態である。この点において、齊己と梁震・孫光憲の間には共通点を見いだすことができる。

この三者の共通点はこれだけではない。荆南が存続するために必要とされたこの三人は、荆南に住する事を強要されたかわりに、特別な待遇をうけていたのである。梁震の場合は『五代史補』巻四に、

本山野鄙夫也。非有意於爵録。若公不以孤陋。令陪軍中末議。但白衣從事可矣。

とある梁震自身の願いを聞き入れられる形で、正式な官僚とならずに白衣の身分のままでいることを許された。これによって、荆南の政策に意見はいうもののその結果にたいする責任を免れようとしたのである。このような梁震の荆南政権から離れようとする考えは、彼を登用した武信王の死後にも顕著にあらわれている。梁震は孫光憲を自身の後継者として立てて隠居してしまうのである。このような態度をとる梁震にたいして、齊己は「寄梁先輩」（『白蓮集』巻九）という詩を贈り、彼の出俗の志に共感を示すのである。それは、梁震に自らの「一字師」である鄭谷の面影を見たからであった。

梁震に後継者として国の舵取りをまかされた孫光憲は、長きにわたって荆南の政事にかかわることとなった。荆南が宋に降ることを決定する際にも孫光憲は大きな役割を果たしている。『十國春秋』巻一〇二は、このとき孫光憲は宋にたいして徹底抗戦を主張する将軍・李景威に対して、

汝峽江一民爾。安識成敗。中國自周世宗時。已有混一天下之志。況聖宋受命。眞主出邪。王師未易當也。

と述べたとある。このような敵国宋を重んじ、自国荆南を軽んじ

る発言さえも孫光憲には許されていたのであった。

齊己の場合もまた趨奉を免ぜられるという特典を王よりうけていた。齊己も「渚宮莫問一十五首幷序」（『白蓮集』巻五）中において

余不覺欣然而作。顧謂形影曰。爾本青山一衲。白石孤禪。今王侯構室安之。給俸食之。使之樂然。萬事都外游息自得。則雲泉猿鳥。不必爲狎。其放縱若是。夫何繫乎。

と素直に喜びを表現している。

しかしながら、こういった扱いを受けてもなお、三者の心中に生じた荆南高氏にたいする不信感をぬぐい去ることはできなかったのである。なぜならば、高氏一族に対する不信感のおくには三者が共通して抱えている不満があったからである。

彼らの不満の原因を示しているのが、『十國春秋』巻一〇二に記載される、

光憲素以文學自負。處荆南。怏怏不得志。常慕史氏之作。頗恨居諸侯幕府。不足展其才力。每謂知交曰。寧知獲麟之筆。反爲倚馬之用。

という部分である。ここで孫光憲がいうように、諸侯の幕府程度では自らの文学の才能を発揮することはできないというような考えが常に頭の中に存在したのである。それゆえに、孫光憲は齊己の詩集『白蓮集』序に中唐以来の詩僧について説き、齊己をその流れの中に位置づけるのである。

結局のところ、この三人は形の上では荆南高氏に仕えてはいたが、自らの意識としてはあくまでも「唐人」であり続けたのであり、そのことにより深い関係を持つにいたったのである。

境界なき世界の中で
――イアン・マキューアンの『黒い犬』における悪の遍在――

松宮園子

一九九二年に出版されたイアン・マキューアンの『黒い犬』は、ある女性の人生の転機となった四十三年前の出来事を軸に展開する。第二次大戦終結直後のフランスの片田舎を新婚旅行中の若い英国人女性ジューンは、夫とはぐれた山道で二匹の巨大な黒い犬と出会う。これを「悪」との遭遇と見なした彼女は、その後神秘主義に傾倒し、社会改革と合理主義を信奉する夫バーナードとの結婚生活は破綻をきたす。小説は、この夫婦の娘と結婚し幸せな家庭生活を送るジェレミーによる、義母ジューンの「メモワール」として提示されるが、その形式は一般的な伝記とは大きく異なっている。第一章では、今は老人ホームで死を待つジューンに対する、ジェレミーによる最後のインタビューの模様が語られる。第二章ではジューンの死から二年後、壁が崩壊した直後のベルリンに飛んだジェレミーとバーナードの小旅行が、続く第三章では、ベルリンでの短い滞在を終え、過去の事件の舞台であるフランスの田舎を再訪したジェレミー自身の体験が述べられる。そして最終章で時は遡り、四十三年前の出来事がジェレミーによって読者の前に初めてつぶさに再現されるのである。この章構成から明らかなように、ジェレミーの「メモワール」の主題はジューンの生涯というよりも、むしろ伝記執筆を志す彼自身であると言える。